1

「動けない…。」
　天使の御役目である聖戦へ向けて、進化を促す自身のパートナーを探す為に現実世界へ渡る事。
　これは誉れであり尊ばれる事であり、それに選ばれるデジモンは尊敬に値すると言われているが、あくまでそれは人型であるデジモンだけである。
　ケルビムの末裔である僕ら獣型は単純に駒として戦う為に選別もなくほぼ全てのデジモンが送られる。
　人型は獣型を軽蔑し、意味嫌うのもあり、送り方も送り先も雑で身体への負担は想像を絶するものであった。
　普段からの叱責という名の憂さ晴らしで負った傷と相まって転送先から一歩も動けなかった。
　転送先は、薄汚れた路地裏であった。
　(同じ日本に送るとは上出来だよ全く…。)
　特に感情が動く事はない、それは主への冒涜とも言える獣の血を引き継いだ罪人である自分達、獣型への仕打ちとしては真っ当であると、そこから自らの罪を禊ぐ為に動けない自分事を恥じるべきである。
　…そう教え込まれた。
　どの位そこにいたか日影とはいえ、夏の暑さにない体力が奪われいく、身体には虫が集り不快感が強い。
　しばらくして、1つ目の奇跡と巡り合った。
　腹に隠したディーアークが鼓動を始めているのが分かった。
「…っ」
　パートーナーが近くにいる…ひとりの少女、10 歳位だろうか。
「…っ！っ！」
　なんとか接触を試みるが、以前やられた喉のダメージからか声が出ない。
　でも…パートナーなら僕の事を…。
「かわいそ…。」
　その一言と不快感を露わにした表情を残し、少女は去って行った。
　(…。)
　何も感じはしなかった。
　ただ粛々と事実は理解し、脱力感だけは感じ取った。
　失望も悲しみも結局は振れ幅だ。
　期待とかのプラスの感情があるからマイナスの感情に振れる。
　今までの自分の人生にそんなものなんてなかった。
　むしろ、少しホッとしたのかもしれない。

2

　ただ…2つ目の…僕の人生を大きく変える奇跡がすぐに訪れた。
「叶こっち！…ほら、君!?大丈夫!?」
「おい、大丈夫か？ていうかそいつ犬…なのか？」
　赤髪の少年が僕をなんのためらいもなく抱きあげてくれた。
　（温かい…。）
　生まれて初めてかもしれない他人の温かみを感じたのは。

　それから、少年とその家族、たまに白髪の少年にグチグチと言われながらも世話をされ、死の危険から脱した。
「どうするんだよそいつ？飼うのか？」
「う～ん。でもこれ、なんかの機械？この子大事に持ってたんだけどなんか鑑札？的なのじゃない？」
「マイクロチップって訳じゃないし鑑札はないだろ…。」
「でも、元の飼い主もいそうな感じだし…とりあえず探すしかないんじゃないかな？」
　この少年は、僕の為になにかをしようとしてくれている。
　彼の温かさは、主の説く愛を感じる。
　しかし、彼は…彼の家族含め聖別には選べれない。
　よくてビバリウムで進化と繁殖の為に使われるくらいであろう。
　…なぜ？僕を見捨てたパートナーが選ばれ彼は選ばれない…？不合理で不条理だ。
　その時、僕に初めて揺れる感情が芽生えた。

3

彼の寝顔を見る、幸せそうな顔で寝ている。
彼が不幸になる世界があっていいのか…いや、そんの事があっていい筈がない…僕が許さない。
主の愛を受けるのはあんな奴らじゃない…彼と僕だ。
僕は、愛おしい彼に別れを告げた。

4

　ディーアークが反応し、進化を促される。
　目の前のパートナーとなるべきだった少女は恐怖にこちらを見ている。
　進化をした事で傷が一部直っていき声も出せるようになっていた。
「無駄だよ、君の両親も起きてこない。
　2、3日は起きないんじゃないかな？」
　ガーゴモンの力で少女を縛っているためにこちらに恐怖を目で訴える事しかできないようであった。
「安心しな、死にはしないよ。
　パートナーを殺せば、僕にどういった影響が出るか不明瞭だしね。
　それより、君はデジモンの進化について知ってるかい？あぁ答えなくていいよ独り言なんだから。
　デジモンの進化はパートナーとの関係、精神状態、デジモンの能力如何でで進化先が分岐するんだ。
　僕ら天使もこれを重要視してるけど、もうひとつ退化がある。
　これも進化やその時の状態で変化するんだよ。
　これって結構重要だと思うんだ。
　僕らの考えじゃあ進化ばかり着目するのも当然だけど、僕ら獣型もさ、条件さえ満たせば変化するんじゃないかと思うんだ。
　でもさ、その時のパートーナーの負担は結構掛かるんだ。
　大丈夫、さっきも言ったけど殺しはしないよ？
　でも、まぁ他はどうでもいいけどね。
　ねぇ、僕と彼の為に生贄になってよ？」
　少女が恐怖で涙を流し始めた。

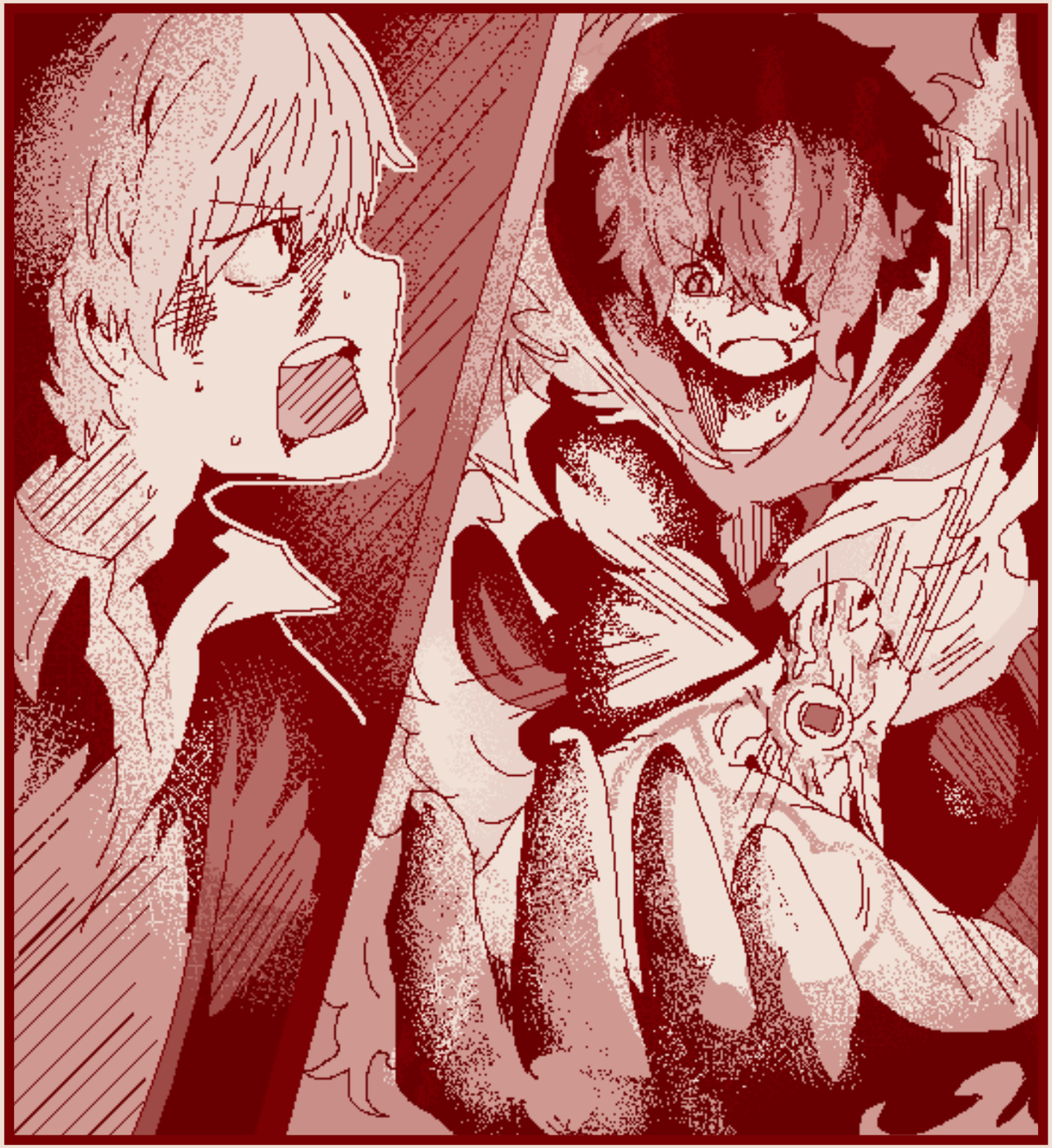
「待っててね…勇太。」

5

　勇太が、インペリアルドラモンのメガデスを防ぎ、車両の人間、デジモンは命を救われた。
　しかし、ヴォ―ボモンは叶に奪われ今まさに勇太を殺そうとしている。
「おじちゃん…お兄ちゃんこのまま…。」
　健太郎の隣にいた少女が袖を引く、少女はまだ幼くその言葉への忌避感から言わなかったが何を言おうとしているのか理解できた。
「はぁ…はぁ。」
　（俺には…もう関係ない事だ…なのに。なのに。）
「誰かお兄ちゃんを助けて…。」
　涙目でぽつりと漏らす少女の言葉に、健太郎の動悸が早くなる。
　誰かが少女と反対側の袖を引っ張る。
　サイバードラモンが急かすように何かを訴えかけるように見ていた。
　その時健太郎の中で何かを弾けさせた。

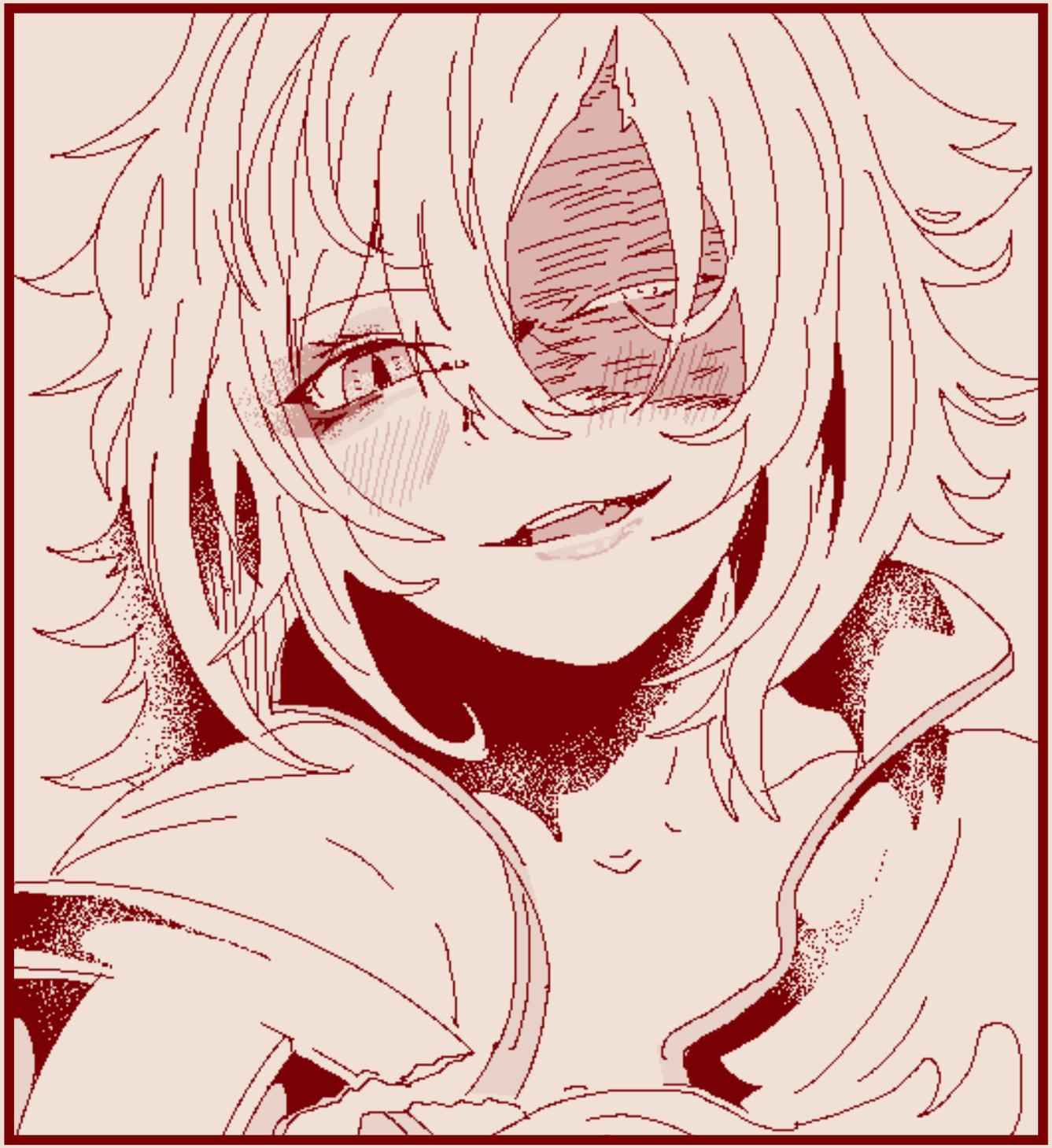
6

「「お前…ルクスモン。」」
　フレイヴォ―ボモンと勇太の間に入ったのはルクスモンであった。
　ルクスモンはフレイヴォ―ボモンを弾き飛ばす。
「やぁ、勇太お困りみたいだね。」
「何しに来た…？」
　勇太は怪訝な顔でルクスモンを見る。
「やだなぁ、大切な愛しの勇太の為にやって来たんじゃあないか。」
（この変態…確か勇太に執着していたな。
　今までの事を考えると何か企んでいるのか？）
「フレイヴォ―ボモン！」
　叶の指示にフレイヴォ―ボモンがルクスモンに向かって行く。
「おっと、クラウドバリア。」
　ルクスモンの前に光の円盾が出現し、フレイヴォ―ボモンを吹き飛ばす。
「チッ。」
「叶、ちょっと待っててね。
　君の相手は後でするよ。」
　ルクスモンは勇太の方に振り返る。
「勇太ぁ、僕を拒否するのはいいけど、それでどうするんだい？
　あの、淫ば…おっと光ちゃんをどう助けるつもりだい？
　黒蜥蜴は本当のパートナーのとこに行っちゃったしね。
　先のとは違う、洗脳じゃないんだから取り戻せないよ？
　フェアリモンの脚だって D3 に格納せれてるんだろう？
　君には何もない、ただの人間の子供さ。
　何ができる？」
　ルクスモンが真顔で勇太に顔を近づける。
「君は死ぬだろうね。
　君自体正直、戦って死ぬ事はなんとも思わないだろうけど、他はどうだろうね？
　光ちゃんは君以外の言葉を聞くかな？周りの連中だって、口では助ける事に協力的かもしれないけど、現実世界の侵攻まで話をが大きくなった時に果たしてどうかな？」
「はぁはぁ…。」
　勇太の呼吸が荒くなっていく。
「でも…これ以上…。」
「できるよ。
　僕は君の為にいるんだから。」
　ルクスモンが真剣な顔で勇太の胸に指を差す。
　そうすると、勇太の胸が光り、そこからデジヴァイスが現れた。
「これは…？」
「君のデジヴァイスだよ勇太。
　ずっと黙っててごめんね、勇太。
　君の本当のパートナーは僕なんだよ。
　でも、色々あってね。
　もう君はあいつとパートナー関係を仮とは言え、結んでるから混乱させたくなくて黙ってんだ。」



7

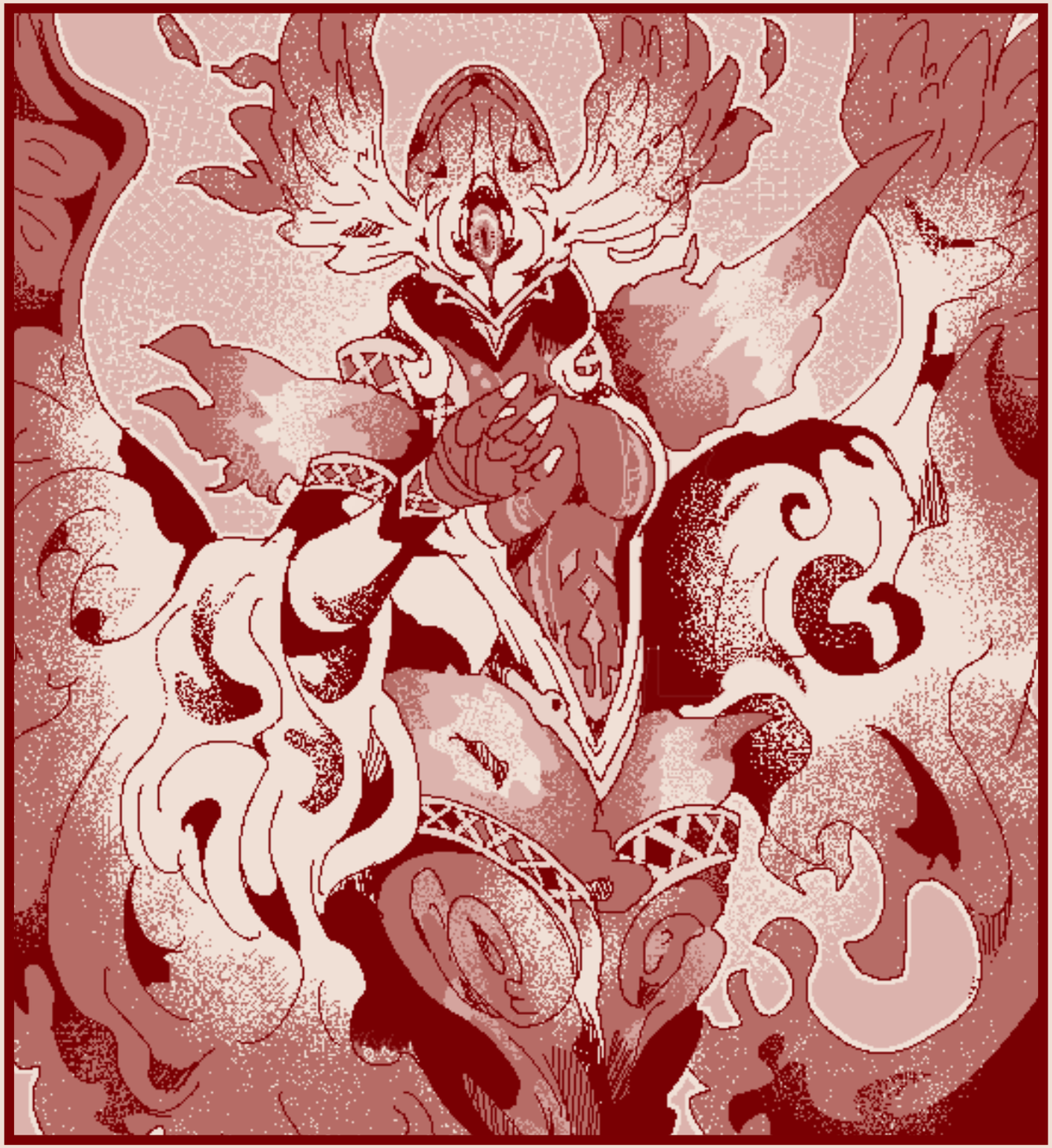
「さぁ、勇太…手に取って。
　ふたりでデーモンを倒して、光ちゃんもヴォ―ボモンも助けよう。」
「はぁはぁ…!!」
　勇太がデジヴァイスに手を伸ばす。
「やめろ!!!勇太!!!」
　勇太が声の方を向くと竜馬が叫びながら走って来ていた。
「竜馬さ…ん。」
「あらら。」
「そいつから離れろ勇太!!!
　数年前、そいつは自分のパートナーを植物人間状態にした奴だ!!!！
　お前のパートナーでもなんでもない!!!!!!
　何か企んでる!!!そのデジヴァイスもその子のものだ!!!！触るな!!!!!!!」
「なっ!?」
　勇太が、手を離そうとした瞬間にルクスモンが勇太の手を無理矢理取りデジヴァイスと手を触れさせる。
「お前!!!!???」
「大丈夫、君を英雄にする事は本心だよ。」
　勇太の腕にデジヴァイスが侵食していく。
　勇太を中心に眩い光が上がっていく。
「がああああああ!!!!!お前…!!!!!一体!!!!!？」



8

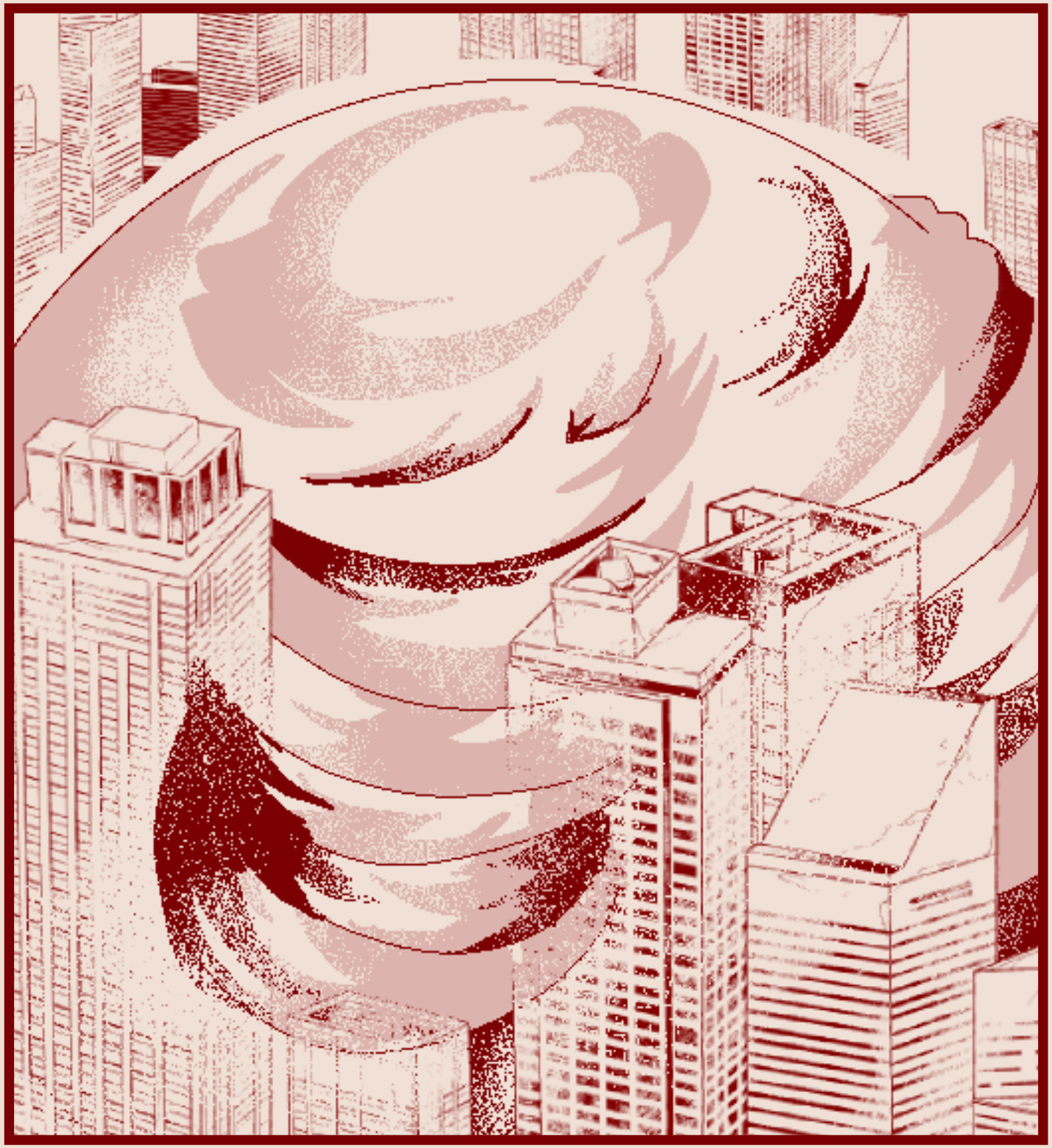
「この傷、覚えてないかい？」
　ルクスモンがヘルメットを外す。
「その傷!!!???」
「お前…まさか、あの時の…。」
　ルクスモンの左顔には大きな傷があった。
　その傷は以前、勇太が叶の知り合いの少女に自分の家では飼えないからと助けを求められた時に助けたあの…。
「やっと、思い出したかい？
　ねぇ勇太？僕結構傷ついたんだよ？
　くくくまぁ、いいや。
　あぁやっとだ…やっと君とひとつに。」
　ルクスモンが頬を紅潮させ、恍惚な顔を浮かべた。

「マトリックスエヴォリューション。」



「やめろおおおおおおおお!!!!!」
　勇太とルクスモンが重なりひとつになっていく。
　炎が巻き上がり、そこには炎を纏った天使型のデジモンがいた。

「ハシュマモン。」

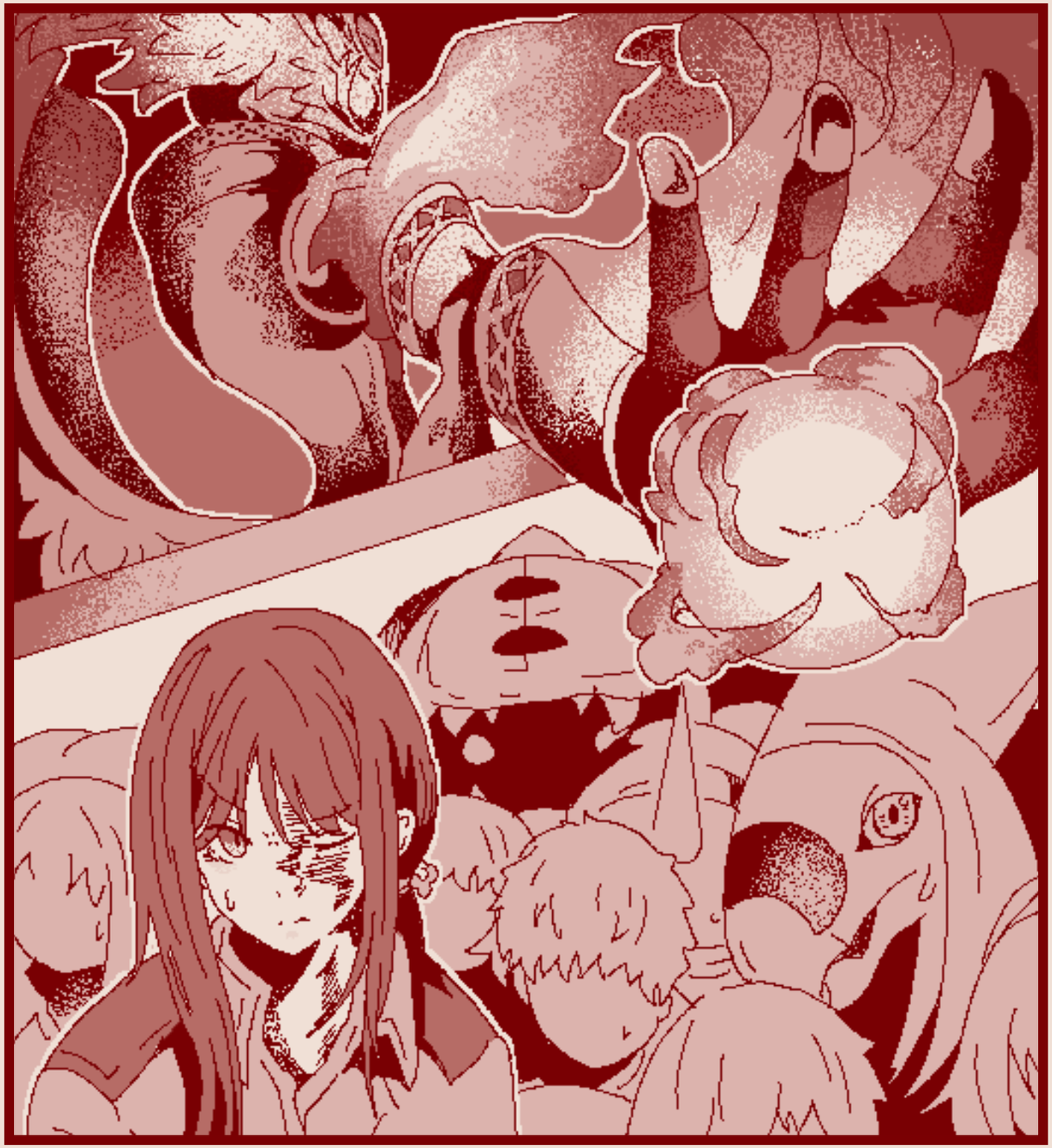


13

「…逃げるぞ。」
「だけど…「黙れ!!!！命令通りにしろ!!!！インペリアルドラモン!!!!!
　来い!!!！フレイヴォ―ボモン!!!」
　叶はインペリアルドラモンに大声で叫びその場をすぐに後にした。
「ふふ…逃げ足は速いじゃないか。
　叶…信じてもらえないかもしれないけど君にも感謝してるんだ。
　だから今回は逃がしてあげる。
　でもね、それよりも僕は勇太が大事なんだ。
　だから、次会う時は、黒蜥蜴事殺す。」
『何をする気なんだ!?お前!?』
「まぁ見てなよ勇太。」
　ルクスモンがデーモンの軍団に手を伸ばす。
　ハシュマモンの手に炎と雷が集まり小さな球となる。
　それが、光速で射出される。
　一瞬の静寂の後、一体を巻き込む大爆発が起きた。
　同時にその爆発はオグドモンを巻き込み、脚から崩れ落ちていた。

「なっ!?ありゃあ一体?!!???」
　突然の爆発に慎平が大声を上げる。

「…ほう。
　アレは天使か？随分早いな。」
　戦闘を止め、デーモンが分かっていたかのように爆発地点を見た。
「デーモン様。」
　デーモンの影からデビモンが現れる。
「申し訳ございません。
　今の爆発でオグドモンと兵の半数以上が…。」
「良い。アレの出現は、ワシにも予見できなかった責めるつもりは毛頭ない。
　それより、良いではないか楽しみが増えるというもの。」
「一度戻って体勢を…。」
「ふん、仕方あるまい、命拾いしたな貴様ら。」
　デーモンが見た先には満身創痍のケルビモン達がいた。
「次は本気で来いケルビモン。
　今度こそ殺してやる裏切者が。」
「…。」
「ワシは今気分がいい、一つ忠告してやる。
　アレはお前達の味方では決してないぞ。」
「…。」
　そう言い残すとデーモンは消えて行った。
「…命拾いした？」
　良子がアグモンを担いでケルビモンに話しかける。
「ケッ！尻まくって逃げんじゃねえ!!バアカ!!!バあああか!!!！」
「お辞めなさい、おはしたないわよ。」
　サンドリモンがベルスターモンの頭を小突く。
「…あの言葉のお意味お分かりますか？」
「…戻ろう。
　先程トレイルモンと勇太達ががいたのが見えた。
　もしかしたら危険かもしれん。」



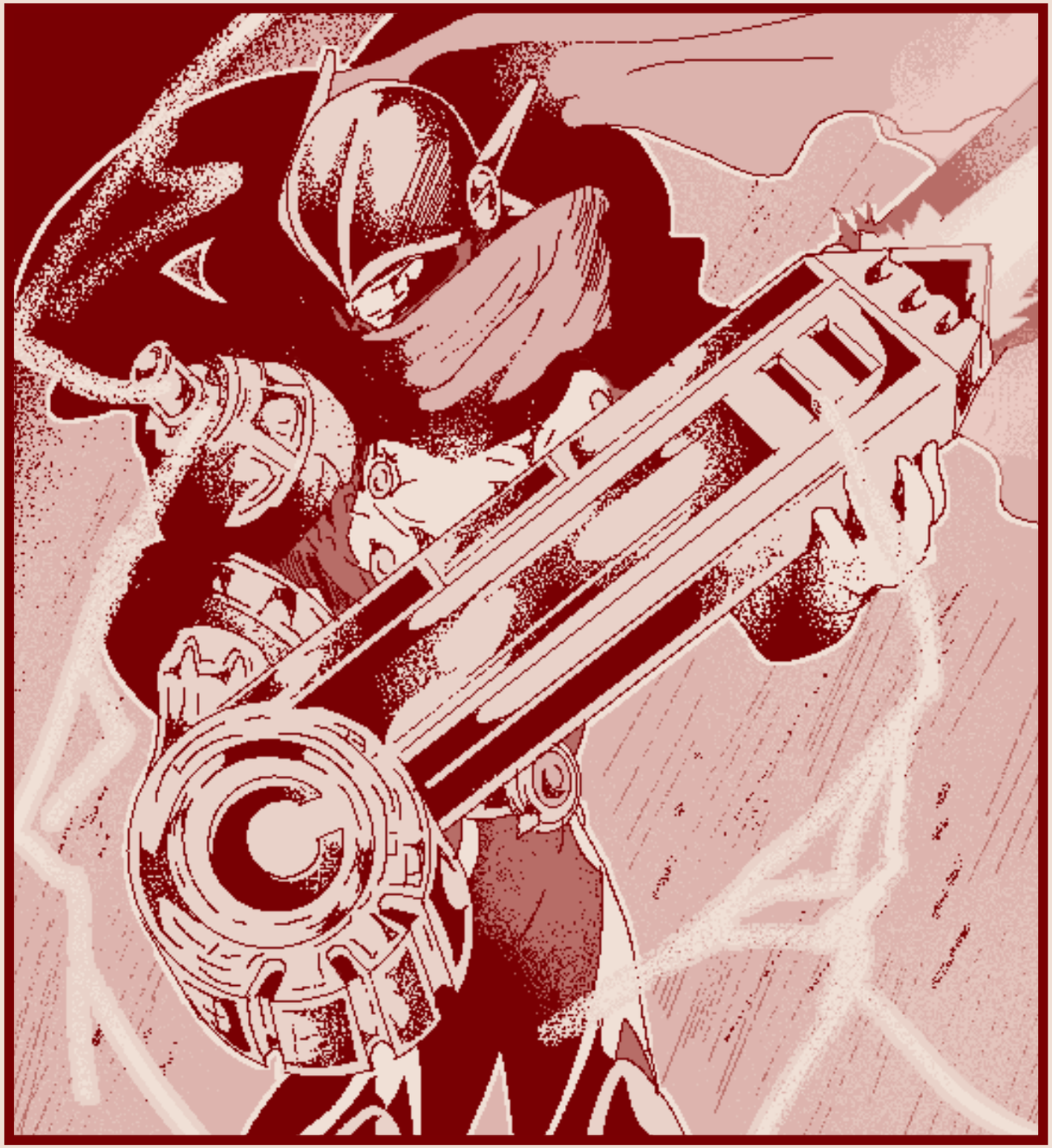
『凄い…』
「そうだろう勇太。
　アレで悪魔もついでに君達のお仲間も結構死んだかな？」
『え…？』
「勇太、先言ったろ。
　僕結構傷ついたんだ。
　だから君に罰を与えなきゃ、ふふ愛の鞭さ。」
『お前!!!??何を言ってるんだ!!!??オイ!!!！何をするつもりだ!!!!!????やめろ!!!!!!』
　勇太が抵抗しようとするが、身体の主導権は完全にルクスモンが握っていた。
　感覚は伝わるが、声も外には出せず、身体は一切言う事を利かなかった。
　ハシュマモンはその腕をトレイルモンの方へ向け、その手には炎と雷が集まってきた。

「おい!?あいつなにやるつもりだ!!??」
「先の今度はこっちに撃つつもりかよ!!??」
「なんで!?？さっきはあの子私達を庇って!!!???」
「おい!!どけ!!!逃げるんだよ!!!」
　人間もデジモンもパニックになりはじめていた。

「やめなさい!!!!!」

　すみれの一喝で周囲の声がピタリとやんだ。
「大丈夫です。
　私とシンドゥーラモンが必ずあなた達を守ります。」
　群衆を掻き分け、先の戦闘でボロボロになったすみれとシンドゥーラモンが前に出る。
「ごめんなさい。シンドゥーラモン。
　こんな事に付き合わせて。」
　すみれがシンドゥーラモンにだけ聞こえる小さな声で呟く。
「すみれちゃん。
　おばちゃん、あんたのそういうとこ誇りに思うわよ。
　それに、死にはしないわよ。
　おばちゃんが絶対すみれちゃんも他のひとも守ったるで。」
「…ありがとう。」

「じゃあ勇太バイバイを言いな。」
『やめろおおおおおおおおおお!!!!!!』
　勇太の叫びも虚しく炎球は発射された。
　が、次の瞬間それは弾き飛ばされた。
　そこには、健太郎とサイバードラモンがいた。
「その辺にしときな、そいつはヒーローに憧れて馬鹿正直に真っ直ぐに進んでるんだ。
　ここで変なケチは付けさせるのは…俺が許さねえ。」
「へぇ誰だい君は？」
　健太郎がジャスティモンのカードを手に取る。



「通りすがりのジャスティモンだ。
覚えておけ。
マトリックスエヴォリューション!!」
深紅のマフラーがたなびく。
雷鳴と共にジャスティモンがハシュマモンの前に立ち塞がった。